

「父母について」

平成20年9月6日

西東京本部 浜田山支部 上村萌

私が父や弟と空手を習い始めたのは小学四年生の時、父から「やらないと太る」と言われほぼ強制的に入られました。母は空手には入門しませんでしたが、習いはじめの頃によく応援してくれました。

当時はまだキツイとっていた基本一本目の拳がなかなかあがらずに、父と一緒に練習を続けました。

木曜日と日曜日の週二回の練習に耐えられず、両親に「もうやめたい」と何度も訴えましたが、その度に「黒帯になるまではがんばってみなさい。黒帯になったら続けるかどうか自分で決めなさい」と言ってくれたので自分で続ける決意ができました。

練習に疲れて休もうと後ろを向くと、そこには一人で黙々と練習する父の姿があり、

当時はその姿を見て思い直して練習をすると
いった日々の繰り返しでした。
そのうち級が上がってゆくにつれ、やがて
空手は父や弟や自分にとって日常になってゆ
き、いつの間にか下の帯の人に教える立場に
なり戸惑いも覚えました。
父は何度か怪我もしましたが、どうにか三
人揃って無事に初段審査を迎えることが出来
ました。
私にとって父母はかけがえの無い存在であ
り父がいなかったら空手を続けることは出来
なかったと思いますし、母が応援してくれな
ければやはり辞めていただろうと思います。
しかし今は空手を続けて良かったと思います。